被爆者として次の世代に伝えたいこと、望むこと

当時13才 学徒動員で建物疎開後かたづけの作業の開始直前で被爆、級友と共に建物の下敷になりはいおて目にした母子の血まみれの姿、私が東から西に移動した市内の火炎地獄、その私が今日まで生きておられたとつくづく思うこの頃です。

思いおこせば、8月6日記録によると、市内に生徒動員26,800人作業、被爆死75000人と云われています。

あの一瞬の被爆で多くの人命を奪い広島は廃墟となったが、生活との戦いで運命に生きて来た。しかし時代は流れ私たち被爆高令者は、あの惨状を口にしません。思い出すのがおそろしいからです。おわかりですか。

若者は無欲で生きつづけました。その結果がどうでしたか。これをつたえるのが私たちのつとめです。

「ノーモアヒロシマ」若い世代と共にさけびつづけましょう。

原爆ドームはじっと世の中をみています。

平和の願い……これが原爆ドームの心でしょう。

家族五人を亡くして

呉原爆被爆者友の会
樽本　叡
（被爆時年齢　十三歳）

被爆当時、私は広陵中学校二年生でした。八月六日は、学徒動員で、比治山橋の東側に集合し、家屋疎開後の後片付けをするため、建築中の消防署の建物の中に入ったとたんに被爆した。建物の下敷きになったが、なんとか這い出した。辺りは真っ暗で、「助けて！」という級友の声で、数名を助け出し、作業用の大八車に乗せて、母校の広陵中学校まで運んだ。その後、御幸橋を渡り、吉島飛行場前を通って二つの川を渡り、江波線伝いに土橋まで行った。それから先は火の海で、どうすることもできない。市内西部の避難場所が己斐小学校になっていることを思い出して、くすぶる電車の鉄橋を渡り、ようやくのこと己斐小学校に辿り着き、そこでバッタリ祖母に会った。顔に火傷をしていたので、叔母の家に連れて行った。叔母の家は半壊し、祖父も逃げてきたが、十五日に死亡。祖母も十八日に死亡。私が火葬したが、火葬場のあちこちに薪を積んで、死体を焼いていた。横堀町（現・榎町）の自宅の焼け跡から、母と姉の遺骨を拾った。あちこちに真っ赤に火ぶくれした死体がころがっており、防火水槽には、数名が仁王様のように

手を広げて亡くなっていた。どんなにか苦しかったろうかと思う。

姉は、水主町の県警通信室の勤務で、六日の朝は勤務明けだったと思う。県庁舎横の橋の付近で、姉らしい人を見かけたと聞き、捜したが見つからなかった。尋ね、尋ねて、似島に収容されていると聞いたので、似島の収容所も訪ねて、名簿を見せてもらったところ、「状態がいいので、宮島国民学校に移した」とのことだった。宮島国民学校を訪ねると、高須国民学校に移したとのこと。丁度その頃は、祖父母が亡くなって、火葬にしたりしていたので、姉を訪ねるのが遅くなり、ようやく高須に行ってみると、十七日に死亡しており、東洋工業に移っていた県庁で遺骨を受け取った。

結局、私は家族五人を原爆で亡くしたことになります。父は、朝鮮から帰国する途中、船が沈没して死亡（同僚の話）。私と学童疎開をしていた妹の二人が助かり、孤児になったため、しばらく叔母の家で暮らした。その後、ある人の好意で（後に「里親制度」だと知った）、二人とも何とか高校を卒業し、私は福祉の道に進んだ。私を育ててくださった恩返しの心算で、知的障害児、養護施設の職員になり、昭和二十五年から住み込みで働いた。

私も長い間沈黙していたが、原爆の悲劇は、語り継いでいかねばならないことだと考え、山口勇子さんの「おこりじぞう」の紙芝居を作り、子供や大人に被爆体験を話し、平和の尊さを訴えているところです。亡くなった学友のためにも、世の中に少しでも役立てればと思って、行動している今日この頃です。

「空白の十年」被爆者の苦闘

広島県原爆被害者団体協議会

発行 二〇〇八年八月一日

「木枯し紋次郎の話と小説を広げつつ」
西忠雄より、
抜粋。

昭和二十年八月六日の朝

昭和六年（一九三一年）[redacted]生 当時13才
中学三年

当日（祖父、母、姉は家にいた
祖母は姉の生産手伝で他へ嫁は出産
久保田州）

家から比治山橋東詰めの
消防署建築中の前に
集合八時

中味は大根
大根を小さなサイコロにして米と炊く

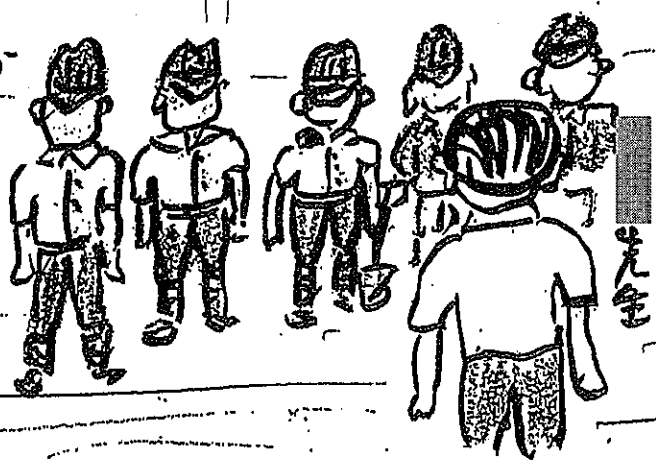
帽子
軍帽
紙のひもで
編んだ物で
雨にぬれたら
ぐちゃぐちゃ
となります。

軍にははく
藁ぞうり
田舎の人に祖母
がたのんで
いただきます

先生より
今日の
作業の
指示を
うける
八時～

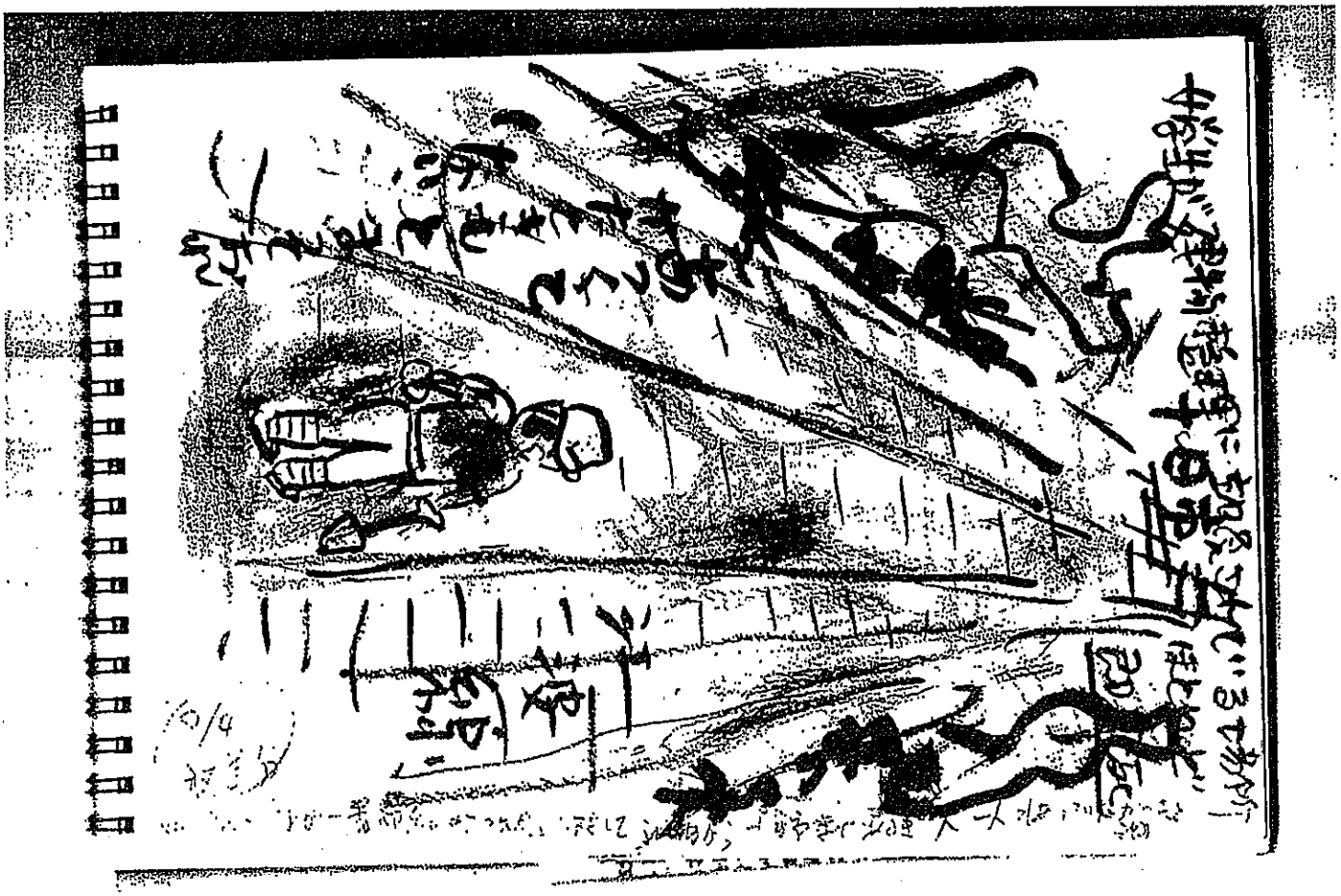
解散
作業に
とりかかる

建築中の消防署に
級友と入りました。



相生
学徒の
[redacted]先生

比治山橋の西より
母親が子を抱いて
近寄るを来ました
母親は頭から血を流し
服は地獄
腕の皮はたれさがっています
私が目に
地獄絵です。



我が家は
火の海、
そのこちらは
火のかたまり
一面の火の海
で火柱は
あがっていたかった
見ただけで
ふるえだめだ
十日市に
むかう、

私の日本陸軍軍人生活と廣島原爆体験記

1　　2013, 1, 10

今から68年前私が日本軍軍人として、台湾から日本に渡り、戦後故郷の台湾に戻ってきた体験を話したいと思います。

私が入隊通知を受け取ったのは、昭和20年の1月4日、私が商業学校4年生の時兼ねて受験を受けた、陸軍船舶特別幹部候補生の合格通知で、1月8日に台北の陸軍軍司令部に集合せよとの命令でした。当時中等学校は戦争遂行のため人員が不足し、中等学校は1年速く繰り上げ卒業することになっていた。慌しく出発するため、親戚或いは同学たちとの別れの挨拶も充分できずいそいで
故郷を出発しました。

昭和20年1月は丁度米軍がフイリッピンのルソン島に上陸する直前でした。昭和19年の10月頃から、アメリカ機動部隊が頻りに台湾沖海上に現れ、台湾とフイリッピンとの補給路を切断するため、台湾の上空は毎日グラマンというう艦載機の空襲に見舞われていた。台湾の住民は非常に不安をかんじていました。其の中を僕たちを載せた船が基隆から出発しました。船は敵潜水艦の魚雷攻撃を避けるため。沖縄列島を通過せず進路を西にとり大陸の沿岸に沿って北上、福建省、上海を経由して舟は安全に山東省の青島港に入港し1週間停泊してから黄海を横断して朝鮮半島に沿って南下、対馬を通って門司に1か月ぶりに入港しました。狭い蒸し暑い船倉の中衣服の交換もできず体ぢゅう虱だらけ、宇品の似ノ島で褌一丁になって消毒液の入ったプールに入れれられ徹底的な消毒をされた後に上陸を許可されましたのは真夜中
でした。廣島の旅館で1泊した後翌日四国香川県小豆島郡淵崎村（現在は土庄町）の若潮部隊に入隊しました。部隊は日本全国から集まった16歳―19歳の少年で、北は満州より南は台湾まで約2000人、部隊は北海道から九州の順に7個中隊に編成され
各中隊は更に五個区たいに分かれ、丁度中学のクラスのような感じでした。私は
近畿地方出身の第4中隊に編入されました。この試みは同郷心を更に深く引いては団結の精神を一層堅くする狙いであった。私が入隊したのは2月11日、入隊式は済んでいました。昭和20年2月は、例年になく瀬戸内海に雪を見る日が多かった。暖かい台湾からいきなり真冬の日本での軍隊生活を送るのは辛かった。夜厠へいくのがとても寒かった。兵舎は嘗ての紡績工場を陸軍が接収した簡素な防寒設備の無い物でした。

五月に入り終了式後候補生2000人の大半は有無を言わさず、本土防衛戦

に水上特攻要員として送り出された。一部は九州の南部、四国。紀州の南部の海岸の防衛陣地に、残りは陸軍水上特攻隊の拠点、江田島の幸ノ浦に移転しました。

3

私は6月に第10教育隊に入り第49戦隊に編成されて、幸浦で極秘の内に訓練を受けました。訓練海域では、常時憲兵が監視し、外部に情報を漏らした者は制裁をうけた。極秘の水上特攻隊は一体何者なのか、それはマルレと称する特攻艇、長さ
5.6m幅1.8m深さ0.73m喫水0.26m．トヨタ又は日産自動車エンジン、燃料は高オクタン価のガソリン使用、速度20－２５ノット、航続時間５時間の木造（大部分ベニヤ板）１人乗りの小型艇、250ｋの爆雷を搭載、半滑走型で敵の艦船に肉迫して爆雷を落とす。島近くの山の上から見るとミズスマシのように海上を真っ白い波を蹴って走り回る。スピード感は味わえるものの、故障もしばしば起きた。果たして、この小艇が体当たり戦法で敵の艦船を撃沈できるかと、疑問をはさむ者も少なくなかった。実は実戦において１期の先輩はルソン島のリンガエン湾と沖縄の慶良間諸島と沖縄間の海域で一応実証されていました。少年兵としてはまれに見る大きな犠牲者をだした、比島参加の人員1190名戦死者953名、沖縄戦参加人員340名戦死者123名と我が方の損害も少なくなかった。我々は本土防衛に米軍の上陸作戦に備えて第53戦隊まで編成され、広島湾の近隣諸島で訓練を続けておりました。

さて６月に入り沖縄が占領された後、日本本土の空襲は日益しに激しくなり、日本全国の各都市はＢ29の爆撃を受け殆ど、大きな被害を受けていた。けれど廣島だけが余り被害を受けていなかった。８月６日のあさ警戒警報が解除された後突然ピカット閃光が丁度写真撮影時にマグネシウムを焚いたような真っ白い光が見え、またドカンと大きな爆音を聞きました。広島湾の向かい側から茸状の黒い雲が舞い上がり忽ち晴れ渡った廣島の上空を覆いかぶさりさりました。之が誰もが知る由もないあの恐ろしい原子爆弾の爆発であるとは知る由もなかった。私らの兵舎の天井からバラバラと塵が落ちベットの物置だなの上に積んであった書籍が倒れ落ちてきただけでした。幸ノ浦と宇品港とは約７ｋｍも離れており、更に廣島の被爆中心と宇品の間は５ｋｍもありましたから被害らしきものは無かった。我々は多分広島市の付近にある火薬庫が何かの誘発によって大爆発したのだと思っていた。上司は早速市内をよく知る廣島出身の候補生を派遣しました。市内は建物がもうもうと真っ赤な炎を上げて燃え続け、電柱が倒れ瓦礫で埋まった街路は通れなかったので直ぐ戻ってきました。廣島市内はもう地獄、阿鼻叫喚、戸外にいた人は即死か火傷を負い、木造建築を一瞬にして壊滅せしめ、大きな火災を起こさしめ、怪我人は救急所を捜し求めて右往左往う逃げ回っていた。各機関の機能は殆ど停止状態、上司は救援に行けとの命令が下り、正午頃早速出動、宇品に上陸し御幸橋を渡りわが隊は爆心地へと路面の瓦礫障害物などを除け、又は越えながら市内電車のター

ミナルに集合しました。周囲の木造建築は燃え続けており、まず消火作業に取り掛かった。消火道具は無く手当たりしだい地面に残っていた物を拾って火たたきとして消し、効果は薄かった。此方を消してしまったら、前に消したはずの所から又燃え出すなどしているうちに日が暮れ始めた。作業はずっと続けられとうとう徹夜していたのだった。7日太陽が顔を出してきた時3機のB29が超低空で頭の上に飛んできた時はもう死ぬのではないかと思った。実は低空飛行で廣島市内の偵察に来たのであった。燃えるものは燃えつくしてしまい炎は無
くなったが、まだ燻ぶっていた煙が残っていた。ところところ
地面に残っているのは人と動物の死体、今度はその収容を始めました、死体は真っ黒く焼けて見るのが辛かった、焼け残った市電の中にある死体は丁度、北京料理に出てくる北京ダークが焼釜から出されたように赤茶けていた。各家の前に防火用水として備え付けていた水槽や漬物樽から顔を伏したまま複数の死体を發見した。怪我をした人々又は喉の渇いた人が何とかして水を捜し求めその中で傷ついた体を癒そうと苦しんでいたかを考えた時、心苦しかった。元安川の川面に浮かんでいた死体もそうではなかっただろうか、土手の上で他の救助隊員が川の上を小型上陸舟艇で潮の干満によって浮遊している死体を引き上げているのを見た。如何にかしてあの阿修羅地獄から早く逃れようとして飛び込んだのだろう。戦争は人間の仕業である。勝っても負けても無辜の人民が犠牲になる。　こんな悲惨且つ残酷な有様を何故この地球上から消滅させることができないだろうか。過去の歴史を振り返って見たら、先にあつたことは、また後にもある、先になされたことは、又後にもなされる。と旧約聖書の伝道の書第一章9節にこう書いてある。我々は再びこの歴史を繰り返さないよう、戦争に絶対反対しなければなりません。晴天が続き8,9,10,11,12日まで死体の収容を続行しました。日が経つに連れ死体が腐敗膨張し始め素手で運んでいたのはだんだん怖くなった。防毒マスクの無い侭、死毒の恐ろしさは分っているものの、最っと怖ろしい原爆放射能症が起こることは知らなかった。ずっと1週間現場に野宿していたので、2次感染の危険も感じていた。

なけなし・・・

移動しながら作業していたら沢山な十、四、五歳の少年のやけ死体を発見した。之は丁度広島市の建物強制疎開作業中の生徒でした。広島市の殆どの全部の中学、女学校、の1.2年生、又は国民学校高等科の生徒が動員されていた。死体を集めて掘った壕の中へ入れ荼毘に付そうとしてた時まだ帰らぬわが子を探していた子供の母らしき人が死体に付いていた燃え残りものを見て抱きついて泣いていた情景を見た時、胸が詰まり思わず涙が出た。

急に故郷の母を思い出した。家との通信は廣島局気付けになっていたので、母も自分の安否を心配していただろう　作業中9日又長崎に原子爆弾が落とされたことを知った。カンカン太陽が照り続く炎天下、日にちが経つに連れ、死体の腐敗が早くなり、又爆心地に近づくほど、死体も多くなった。

3

12 日江田島に戻り隊員のある者は、疲労のせいか下痢や感冒の徴候を訴え出た者が少なくなかつたが、自分は軽い下痢をしたのみ、軍部は直ちに皆の血液を調べたが間もなく 8 月 15 日となり、ポツダム宣言受諾の玉音放送でうやむやのうちに部隊が解散復員すことになり結果は分からなかつた。

若い方は話を聞いても、到底実感はとむらわないであろう。広島の惨状は筆舌に尽くせるものではない、廣島の町は殆ど破壊され焼き尽くされて真っ平らになっていた。務めて廣島長崎の平和記念館を訪れ参観して下さい。剣を打ち変えて、鋤とし　槍を打ち変えて鎌とし　国は国に向かって剣をあげず　再び戦いのことを学ばない。全世界の人々が皆平和で幸福な暮らしができるよう、核兵器をすべて撤廃し、この地球上から戦争を無くするよう努力して行きましょう。

陳賜興 学於 [redacted] ゼミ (Seminar)
校外実習

No1.

私の被爆体験と現況

平成二十二年(二〇一〇年)三月一日記

津島 休 [redacted]生

昭和五年 [redacted]

(旧姓 岩本 香代 [redacted])

(被爆当時の住所 広島市尾長町三本松 [redacted])

現住所 広島市 [redacted]

当時、私は十四才、
広島市立第二高等女学校(二年制)の一年生でした。
当校は海田の日本製鋼所に学徒動員で手留弾の鋳型を作っていました。
八月六日、空は真青で雲一つなく、朝日ギラギラ、最高の真夏日和
でした。(これまでの原爆記念日で、このようなお天気は一度もありません)
当日は、登校日で、近くの上級生の [redacted] さんが警戒警報解除で
誘いに来られ、広島駅上り登り岩踏切(現在)東側和田文具店(当時
は道路南側、現在は北側に移転)の前で、『ピカ』も『ドン』も知らず

No 2.

いきなり真正面から猛烈な熱い灰と、熱い風が吹いて来て、二十メートル後ろに飛ばされ（現在愛宕神社附近）に真暗になり、息も出来ず、起き上ろうとしたけれど爆風で立ち上れず、その内に段々と明るくなり、漸く立ち上れて、[redacted]さんを何度も呼んだけれど返事がなく、

どうしよう!!!?　[redacted]さんは、未だに消息不明です）

先づは家に帰ろう、と、歩き出すと、両側の家々から血を流した人達が出て来て、私も血があていないかと見たけれど、血は出ていませんでした。

家に着くと、叔母が「よっちゃんが帰って来たよ、アーア髪が焦げてちぢれとるよ、家の壁が落ちて入れんよ」といい、そのうち私は顔、両腕、両手、両足の甲が熱くて、道路の側のポンプを押して水を出し、洗い流しました。

（今思うに、水で流したのでケロイドにならなくて済んだのではないか？？と、）

当時は靴はなく下駄履きで、その下駄も配給制でした。

（今、NHKの朝ドラ「ごちそうさん」で、戦時中のシーンその通りでした）

家は尾長小学校の南側で裏門からはすぐでした。

学校で手当をしてくれると聞き行ったけれど、人が多くて仲々順番が来ず、その時

No 3.

「又空襲があるからすぐに避難しなさい」と云われ、近所の人達と火内越峠の焼場の山に行きました。　行く途中、道路は髪も重れ下り、大傷で皮膚も重れ下り、頭から血を流している人、体中血だらけの人、着ている物も焼け焦げて、ビヒんな裸足で、「水をください」「水を下さい」とよろけ乍ら、そんな人達が道中いっぱいで、次から次からと続いて、眞に此の世の地獄絵でした。

（今思うと、あの人達どこにどうされたのだろう？）

（人間の魂を描かれた、シャガール展の画と重なります。）

焼場の山に着いて、午後、松の木の下で黒い雨を浴びました。　その後、「わしらの家は今燃えよるけんもう家には帰れんぞ」と近所の人に知らされ、その夜は、隣りの[redacted]さんの実家が峠を越えた池の側にあり、縁側に行かせてもらったのですが、私は夕方から大傷で顔がふくれて目が潰れ、両腕、両手、両足の甲もふくれてパンパンに脹れ歩けなくなりました。

翌日父が背負ってくれて、温品の屋根と床だけの建てかけの家で十日余り過ごし、その後は、姉も私も同級生の山根町の[redacted]さんの家（この辺りは焼けなかった）の一間を借りて、約一ヶ月余り居させて頂きました。

その間、家族は私の火傷の手当をしてくれました。
キニーリの汁、じゃがいもの汁、じゃがいもの汁、死んだ人の灰等を塗ってくれました。
中でも、じゃがいもの汁が一番ヒリヒリしみて痛かったのを思い出します。
友人は手当が出来ず、火傷や傷口からうじ虫が生れて、木の枝でこそげていたそうで、更めて家族に感謝でした。
やがて、父が焼跡に堀っ建小屋を造ったので、家族六人の雑魚寝(ざこね)の生活が始まりました。　キニーイ台風で屋根が飛んだこともありました。
そして十月末頃同級生の[redacted]ちゃんが授業再開を知らせに来て、
「よしえちゃん、色が白うなったね」、「ふた皮くらいむけたかもね」と会話。
授業再開の教科書は新聞紙半ページでした。　物理の先生の問題で、
!!! 水とは、何か!!! の一問だけでH20に始まりの答えでいい点を貰いました。
その若い男の[redacted]先生、授業開始すぐに現れるので消防車というあだ名をつけていました。　イクリー語で!! サンタルチア!! と、英語で!! オールド・ブラックジョー!! の歌を教えて下さり、今日口ずさんで娘二人に聞かせますと、何故か急に、
「アッ、ハッ、ハアーム」と大笑いで、久しぶりの親子三人大笑いで、亦、又笑いが止

No 5.

まらなくなります。

机を並べていた友人に久方ぶりに会います。「原爆で、両親、兄弟が、家の下敷で焼け死んだので、私は、火葬は絶対嫌だから、大学病院に献体を申込んでいるんです」と話され、各々の忘れられない辛い思いを抱えて生きていらっしゃいます。

私の友人、皆んな、お薬と付き合っていらっしゃいます。

私も御多分に漏れず、平成の初め、速い、遅い、止まるの三段脈の不正脈、虚血性心疾患細動と診断され、一時はペースメーカーを勧められたのですが、逃げ出しました。以来、佐伯足薬園[redacted]医院理事長先生に二十年余りお世話になっております。（因みに[redacted]先生は現在[redacted]市就任中です）

有難う、お陰様と、先生と、薬に感謝です。

先日テレビで白血病、細胞、遺伝子について、視聴致しました。多くの先生方が研究されていられることに頭がさがります。

被爆で放射能を浴びている私、体の中のどこかに隠れていて頭をもたげないようキープスマイル、ハッピー、ラッキーとファイトを燃やしています。

No. 6.

一昨年は妹と誘ってファッションセラピーのファッションショーに娘の勧めで参加させて戴き
大変身のもう一人の自分にうっとりでした。　妹は水色のカラードレス、私は白
のウエディングドレスで、ハラハラ、ドキドキ、ワクワクの美しい人生最高の一日でした。
昨年は娘が買ってくれたティアラと、カラードレスで、観客席中央赤ジュータン
の上を歩かせて頂き、夢で見た光景に驚きすごく感動しました。
人生最高を二度も味わえて、体の中の放射能さんを、モグラ叩きで叩き潰
したような気がして、とても爽快です。
二女が言うには、ナチュラルキラー細胞が増えて益々元気になったのだそうです
それで今年も参加に燃えています。
長女はカメラで、二女はビデオでいっぱい撮ってくれました。　私の此の上ない
宝物です。　嬉しくて涙が滲んで参ります。
参加を勧めてくれた娘に感謝です。　ありがとう、ありがとう。
美しい心の種を蒔いた主宰の[redacted]先生、[redacted]先生、美容師の皆様、
多々のボランティアの皆様方、本当に有難うございました。
御陰様でこれからの私の人生、一日一善を心がけて、心に花を咲かせたい。

207.

夏子回ゴして欲張りたいと思っております。
私達世代、戦前、戦中、戦後を生き、精神的、体力的にも鍛えられた色々な思い出が脳裡を駆巡ります。人生では懐かしい思いあとなっています。
衣食住、豊富な最高の今日とても幸せです。でもこの様な時代を知らずして原爆の犠牲となられた多くの方々に心からの御冥福をお祈り申し上げ、いつまでも平和が続きますようにと、合掌で終らせて頂きます。
拙い私の手記をお読み頂き、有難う御座居ました。
享く御礼申し上げます
弥生吉日

ありがとう
明日につながる
楽しい笑顔

ファンションセラピーの
キャッチフレーズ、大好きです

自稱、混沌乃矢の
モザ・リナです

皆様御機嫌よう〜